

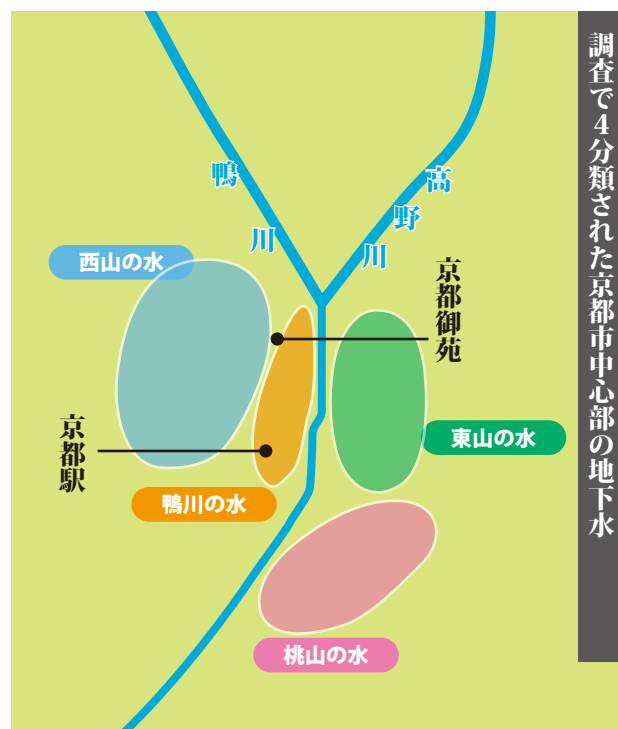
京都の地下水は4分類大学教授らが調査

琵琶湖に匹敵する水量があると言われる「京都盆地」の地下水の水質は京都市内では同じ軟水でも成分別に大きく4分類されることが大学教授らでつくる研究チームの調査で分かった。

成分の数値や水源を特定できるデータに基づき水質分類ができたのは初めてといい「京の地下水」を知る貴重な資料になりそうだ。

チームは立正大の河野忠教授と福島大の藪崎志穂特任助教京都府内の水環境保全に取り組むカップ研究会世話人の鈴木康久さん。

2009（平成21）年から3年かけ京都盆地を中心に江戸時代の都名所図会などで確認できた名水がある寺社や和菓子店や酒蔵など計217カ所の井戸水や湧き水を採取した。



ナトリウムやカルシウムといったミネラル分や水系を明らかにする同位体比などを分析。「水質組成図」として表したところ京都市内では▽東山▽鴨川西部▽桃山▽西山に4分類できた。

日本酒を育む伏見区の桃山の水は軟水だが他地域よりもマグネシウムやカルシウムなどのミネラル分を多く含んでいた。

東山はミネラル分が少なく純水（雨水）に近い成分と判明地中での滞留時間が短いためとみられる。

上京区や中京区などの鴨川西部では砂れき層からミネラル分が溶け出しており鴨川の水が浸透した水質だった。

街中の地下水は深さ10メートルも100メートルでも成分は同じで浸透性のいい土壌であることも分かった。

西山の水は地下での滞留時間が長くナトリウムが他地域より多い。

また京都市内の地下水の水温は年間を通じて平均16～17度前後で京都盆地の年平均気温の15.9度とほぼ同じだった。調査結果は今春日本地下水学会の学会誌で報告された。

河野教授は「京都盆地の地下水流動の特徴から、京都に豊かな水文化をもたらす科学的根拠を明らかにできた。江戸時代以前の水環境が推測できるデータを得られた」と成果を話し、鈴木さんは「京都の食や生活文化に地下水が与えてきた影響を調べる資料として多くの人に使ってほしい」としている。

引用元： 京都新聞【2014年06月08日21時50分】